Institute for Global Education and Culture News

教育総研ニュース

発行：一般財団法人　教育文化総合研究所
〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-6-2　日本教育会館内
TEL:03-3230-0564 FAX: 03-3222-5416 http://www.k-soken.gr.jp

No.57
2022.2.25 発行

私たちはなぜアナキストでなければならないか？

菊地栄治（教育総研所長・早稲田大学）

いまとても気になっている言葉がある。アナキスト（アナーキスト）である。古くはプルードン、バクーニン、クロポトキン…といった面々の濃い思想として語られていたが、近年では人類学者のグレーバーやスコットらのすぐれた研究等を通して学界だけではなく、世界の実践者からも注目されている。わが国では社会主義思想に連なる戦前史をもち、戦後には鶴見俊輔らが深めていった。鶴見は「アナキズムは、権力による強制なしに人間がたがいに助けあって生きてゆくことを理想とする思想」（『身ぶりとしての抵抗 鶴見俊輔コレクション2』河出文庫）と端的に定義している。当人の意識／無意識の別を問わず、「だれも支配しないし、だれにも支配されないこと」、つまり権力の無力化をゴールとする。もちろん、支配の主体が秘匿されている場合の方がはるかに厄介であることは改めて指摘するまでもない。

いま教育自体にかかわる技術・知識以上に求められるべきは、人間と社会を深く洞察することではないか。たとえば、社会がグローバル化する中で、資本主義の呪縛は陰に陽にますます強化されてきている。しかし、現在「資本主義」論が花盛りなのは危機の深刻さの反映でもある。じじつ、地球温暖化だけでなく利潤率の極小化という現実からも「資本主義は終わっている」と論じられる。まっとうな経済学者だけでなく、一般書もこれに加わる。たとえば、ケアや家事労働が（外部化・市場化されない限り）GDP に算入されないなど経済のジェンダー・バイアスは甚だしい。加えて、経済成長に異様なまでにこだわり不都合を金融オペレーションでしのごうとする「新しい資本主義」は、まやかしをごまかしで上塗りしているにすぎない。

他方、無意識裡に「させられてしまっている」日常がある。「しない方が（しなくても）よいのだが…」という思いが後ろ髪を引く。国民国家の操り人形のごとく、教室では心の中ではためらいながらも、「子どものために」と良心的行為にすり替えられてしまう。最終的には、自分で責任を取らなくてすむ「他人事システム」を私たち自身が創り出していることも災いしている。「先生」がふるう権力はもちろん、子どもに付き従われることを可能にする専門職の権威さえ、大きな権力の下支えとなることがある。

日常の出来事を考えてみると、「そういえば…？」と思い当たることがあるのではないだろうか。まさに「特異性（目の前のかけがえのない他者といっしょに生きていくこと）」を前提にするのか、それとも巨大な暴力装置を維持するために他者化し意識の奥底に追いやるのか、が問われている。より小さくさせられている人々とどうやって「ましな社会（場）」を創っていくか…。深い意味でのアナキストとは何かを私自身もう少し丁寧に問い直し言葉にしたい。